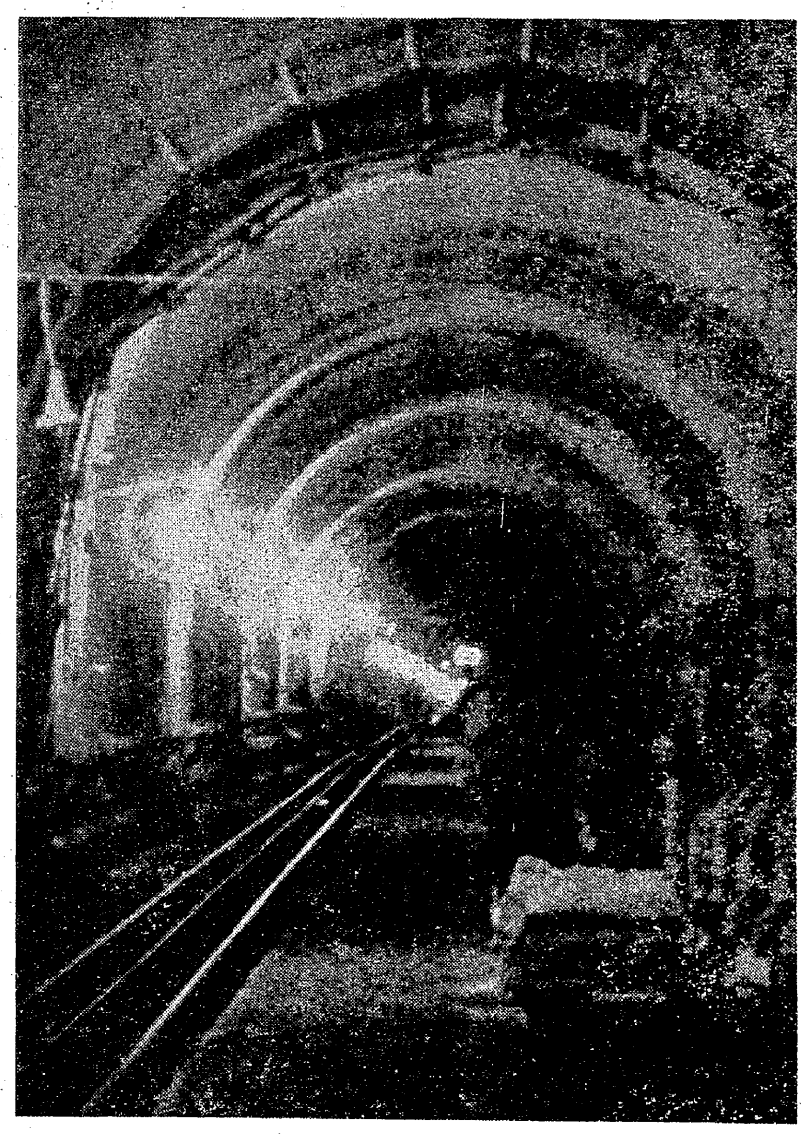
新年文芸

新年文芸を募集致しましたところ、ここにその全作品を紹介する人びとから、ご投稿をいただきました。心からお礼を申しあげます。ただ応募作品が少かったために、各分野にわたって選をお願いするまでには至りませんでした。

あとで、各分野ごとに批評をお願いすることに致します。今年は、私たち炭鉱労働者にとって、かくべつ重大な年となるでしょう。闘いとともに、またそれをはげしくうたいあげる文芸作品も、生みだしていきましょう。



三川鉱のベルト坑道。切羽で堀り出される石炭は、ここを通って坑外選炭場へ吐き出されるが、坑内労働者にとってはまさに生死をきめる関門となるのだ。

詩の部

割烹着

四山指導部　堀前はるお

一九七四年の年は
コトコトと炊事場からの包丁の音
で明けた
「割烹着のかあちゃん」
もう生活との闘いと四ツ巴に
取っ組んでいる
「かあちゃん今年もよろしく頼んだよ」
と
小さく布団に声を包みこんだ
貧しさの中の小さな幸福を大事に大事に
包みこんでくれる
「割烹着姿のかあちゃん」
闘いの中の生活
差別の中の生活
に
耐え抜いてきたかあちゃんが
年輪で鍛えて来た料理の花が
食卓一杯に飾られていた
子供の顔が食卓を囲む
差別の中の生活によく耐えて来れた
この子供達には暗い影一筋すら
見うけられなかった
割烹着をぬいで小さくたたんでは
食卓の隅に座った
かあちゃん
「おめでとう、今年も元気で助け合って行くばいね」
かあちゃんが私に
私がかあちゃんに
長女に
次女に
と
酌ぐささやかな屠蘇だった
さすが少し茶目ッ気な次女も
指先に盃をはさんでは唇を濡らした
「ようとこまで、ひねくれもせず育ってくれたなあ」
と
心につぶやいては日頃の割烹着のかあちゃんだった、今日のかあちゃんに
「ありがとうよ」
と
屠蘇にまろめてごくりと呑みこんだ
いつまでも割烹着のかあちゃんであるように
と
窓より初日射しが手を差しのばして幸を呼んでいるような朝だった

短歌の部

港務指導部　松原直吉

律儀なる者ら猛しと風の中火花たばしる鉄材を切る
組立つる部品を既うごとならぶ朝も澄まざる大気の中に
渡鳥ゆくと急（せ）く声単調に物組む午後の耳目を覚ます
釣り立ての光れるボラにささやける今もぬぐえぬ汚染の疑惑
ひと日終う服はたきおり濁りたる大気の呪縛断ち切るごとく

四山指導部　堀前はるお

住所捜す古き賀状のその中に罹災せし友の賀状残れり
罹災せし友のくれたる年賀状古ぼけしまま状差にあり
幾年か賀状交せし友はいま保安サボにてマッ殺されたり
団結に拳固めん仲間等の屠蘇一献を交しゆく朝
身ごもれる妻も一献かたむけん育ちゆく児の幸を願ひつ

宮浦指導部　平田光男

停年で退職（やめ）し仲間のベルト締め重き金梁荷負いゆく
苦しきも何時も笑顔忘れぬ老坑夫新年迎えヤマを去り行く
荒れ果てた炭住に住む犬もなく夕闇に白く浮く枯尾花

主婦会小浜　菊川五百子

初孫をいだきて参るみやしろに幸多かれと祈るわれなり
健やかに強く育てよあいらしき恵をうけてさずかりし孫
主婦会とともに生れし次男坊も成人式の若者となり
悲喜ともにわかちあえたる主婦会は肉親にまさる姉や妹
爆発後十年たちし主婦たちの苦しみいかにと胸うずくわれ

豊かな生活

三川指導部　木村義明

娘から電話がかかってきた
太洋デパートの火事に
心配してかけてきた
熊本まで行って買う
余裕なんてあるか
孫が
「じいちゃん元気、絵をかいて送ったよ。だからゲーム送ってね」
「ようし送るよ」と目をほそめて
電話を切った

生活保護すれすれの賃金
労働強化と災害の激増
そして異常な物価の高騰
一体この先どうなるのだ
俺達はどうすればよいのだ

一人ひとりの怒りを結集しよう
今こそ炭鉱労働者の底力を
会社へ、自民党政府へ向けて
皆んなで不屈に闘おう
敵を包囲せん滅するまで

やき芋

宮浦指導部　平田光男

お父さん　今日もやき芋しとって
子供が元気な声で叫んで
学校へ行く
買って来たばかりの七輪
うちわをパタつかせ　炎をあおる
焼釜は終戦後すぐに
闇市で地下タビと交換したものだ
やがて三十年になるしろ物
あの頃
父や母は
買出しに一生懸命だった
三十年後の自民党政府は
大企業を育成するため
計画的に物資不足にし
マーケットやデパートでは
人の行列
物価が急上昇し
買占めが終った頃
数倍にハネ上がった金額で
商品は
陳列棚で笑って並んでいる

俳句の部

江島春亭

惜別の去年今年なく駅混める
新天地求め離鉱山（りざん）の
屠蘇を酌む
同志には同志の情（こころ）年
酒酌む
定年のこれからのこと年一新
鉱山を出ぬ一生涯や屠蘇を酌む
（なお、江島さんは新勝立町二丁目）

四山指導部　村中利行

汚染のボラ時雨の空に旨き涙
冬波どっと漁夫が背骨を休める
闇
海谷腐らす漁夫だんまりの眼を
あつめ
鉄梁のくいこむ冬天少しずつ失
せしぼりとられた鉱夫水ばなす
する夜勤明け

四山指導部　堀前はるお

書初めの筆にこもれる力かな
団結に屠蘇一献を交しゆく
三本線新気一転鉱山始め
団結に拳固めん年初め
生きてきしことのしあわせ賀状
書く

川柳の部

平野ミヤ子

父さんが聞いてるように灯りゆ
れ
子をねかせ遺影と語る夜がわび
し
インフレの風が正月を小くし
正月に来いよと田舎から便り
ダイヤの手バーゲンセールをあ
わてさせ
（平野さんのお住まいは「名古屋市港区七番町四丁目三番地、第二愛知寮」）

広告に支配されるな！

新聞減ページと定価

減ページしたが定価はすえおき——という事態に、商業新聞の体質がいま改めて問われています。同じ新聞の場合でもたとえば「赤旗」などのように減ページで定価を割引く機関紙もあるのに、商業新聞ではそんなことは全く考えられません。なぜか——。そこに現在の商業新聞の体質があるようです。

むしろいま、商業新聞の内部で話されていることは「定価を上げなくてはいけない」ということです。それは、新聞の経営を支えている広告が載せ切れなくなって、広告収入が減るため経営が苦しくなるので、定価を上げなくてはもたないだろう、ということなのです。最近の商業新聞の収入構成でみると、販売収入と広告収入の比率を比較すると、広告収入の比率が販売収入を大きく上回ってきていることが特徴です。

すなわち、販売収入と広告収入を加えて一〇〇とし、その構成をみた場合、六〇年安保当時、販売収入五五・一に対して広告収入四四・九だったものが、六二年を境に逆転し、ことし上期では、広告収入五八・六に対して販売収入四一・四という状態になっているのです。

おまけに最近の新聞社は、多角経営をはじめて、情報産業部門に進出するばかりか、不動産業などにまで手をのばして利潤追求の姿勢を強めています、こうした中で読者からの収入の度合いはますます減って、これが新聞の内容にまで影響を与えています。

新聞は六〇年代から七〇年代にかけて大変な増ページをしましたしかしこれは記事を載せるためでした。広告は日本経済の高度成長のなかで増える一方だったのです。

新聞労働者はこうした中で自分たちのいのちと生活をまもるだけでなく、真実の報道にその闘いの成果が出るかどうか、注目したいものです。（青井次郎）【連合】